

犬の肥大性肺性骨関節症

東大農学部家畜病理学教室出題・第3回獣医病理学研修会標本 No. 42



度の犬糸状虫寄生等)が存在することを特徴とする。

この症例はスピッツ(雌, 6才)で上膊部に発生した骨肉腫の肺転移に継発したもので病理学研修会には原発巣および転移巣の組織標本を供覧したが, ここでは転移巣の組織像と肥大した跗前骨の横断面を図示する。

肺転移巣は壊死の傾向が強く高度に石灰沈着のみられる部分もあるが, まだ壊死に陥らない部分では肺胞内に腫瘍細胞の侵入がみられ多核巨細胞も出現し種々の程度に石灰沈着のみられる骨基質がその間に指摘される(図1. 右端)。また拡張してほとんど粘膜上皮の消失した気管支腔内に核分割像に富む円形乃至紡錘形細胞が増殖し求心性に配列する特異な所見がみられるが(図1下部および上部)これは気管支既存の構造に従つて腫瘍細胞が増殖配列した所謂 *Organomimicry* と考え

犬の肥大性肺性骨関節症 (Hypertrophic Pulmonary Osteoarthropathy) は外国においてはすでに多数報告されており特に珍しい症例とはいえないが, わが国ではまだその報告はない。この疾病は四肢各骨周囲における骨樹の新生および軟組織の肥厚による対称性の四肢の肥大と肺または胸腔臓器に循環障害を惹起するに足る何らかの病巣 (大きな結核性病巣, 原発および転移腫瘍, 高

られる (H・E×20)。

跗前骨部では骨樹の新生が左右両側および上面に著明で(矢印) 下面では軽度である。形成された骨樹の先端は隣接するものと互に癒合する。既存の跗前骨はほぼ原形を保ち新生骨は薄い骨梁が網状をなし大部分の腔所には造血骨髓が充満している(図2, H・E×4)。